

(公印省略)

13病防第14号の3
平成13年7月2日

各関係機関の長 殿

福岡県病害虫防除所長

平成13年度病害虫発生予察情報について(送付)

このことについて、病害虫発生予報第4号(7月)を発表したので送付します。

平成13年度病害虫発生予報第4号(7月)
主要病害虫の発生現況及び予報の概要

【普通作物】

作物名	病害虫名	発生現況 (平年)	発生予想 (平年)
早期水稲	いもち病	並	並
	紋枯病	並	やや多い
	萎縮病	並	-
	ツマグロヨコバイ	やや少ない	-
	縞葉枯病	並	-
	ヒメトビウンカ	並	-
普通期水稲	いもち病	並	並
	萎縮病	-	やや少ない
	ツマグロヨコバイ	-	やや少ない
	縞葉枯病	-	並
	ヒメトビウンカ	-	並
	セジロウンカ	並	並
	トビイロウンカ	-	並
	コブノメイガ	-	並

【普通作物 - 早期水稲】

1 いもち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬定期調査の結果、葉いもちの発病株率は0.81% (平年：1.75%、前年：3.00%)、発生ほ場率は12.50% (平年：16.92%、前年：12.50%)であった。

イ 気象予報では7月の平均気温は平年より高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今年の出穂期は平年より2～4日早くなる(詳細は平成13年6月26日発表の福岡県米麦大豆生産改善速報第4号を参照)と予想されており、穂いもちの防除適期(出穂期直前)を失ないようにする。特に、粒剤を施用する場合には早目に行う。

イ 防除薬剤については「平成13年度普通作物病害虫防除基準」を参照する(以下の病害虫についても同様)。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の定期調査では、発病株率は0.94%(平年：0.35%、前年：0.13%)、発生ほ場率は18.75%(平年：10.12%、前年：6.25%)であった。

イ 気象予報では7月の平均気温は平年より高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降は気温が高くなり、またイネの耐病性も弱くなる時期であるため、適期に防除を行う。

イ 粉剤を使用する場合、防除適期が出穂期前後であるため防除適期を失ないように注意する。

ウ 粒剤を使用する場合は農薬安全使用基準に留意して、使用薬剤を選定する。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 いもち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬定期調査の結果、発病株率は0.88%(前7カ年平均：1.17%、前年：0.47%)、発生ほ場率は2.94%(前7カ年平均：6.79%、前年：5.26%)であった。

イ 気象予報では7月の平均気温は平年より高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 補植用の置き苗は早急に除去する。

イ 葉いもちに対する薬剤防除の効果は発生初期ほど高いので、防除時期に注意する。

2 萎縮病(ツマグロヨコバイ)

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬定期調査の結果、早期水稻では発病株率は0.13%(平年：0.23%、前年：0%)、発生ほ場率は6.25%(平年：5.17%、前年：0%)であった。

イ また、早期水稻でのツマグロヨコバイの10株当たり成幼虫数は平均

3.38頭（平年：7.46頭、前年：2.75頭）、発生ほ場率は87.50%（平年：70.09%、前年：43.75%）であった。
ウ 幼苗接種法による検定の結果、イネ萎縮ウイルス保毒虫は確認されず保毒虫率は0%（平年：0.85%、前年：0%）であった（詳細は平成13年度病害虫発生予察情報第3号を参照）。

- (3) 防除上注意すべき事項
本病を対象とした防除の必要はない。

3 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 早期水稻での発病株率0.13%（平年：0.04%、前年：0%）、発生ほ場率6.25%と平年並（平年：1.72%、前年：0%）であった。

イ ヒメトビウンカの10株当たり成幼虫数は平均14.63頭（平年：11.02頭、前年：1.44頭）、発生ほ場率は81.25%（平年：60.10%、前年：50.00%）であった。

ウ ラテックス凝集反応法による検定の結果、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は平均0.65%（平年：0.33%、前年：0.45%）と前年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

本病を対象とした防除の必要はない。

4 セジロウンカ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 筑後市の予察灯で6月5日に初飛来を認め（平年：6月8日、前年：6月1日）、同様に筑紫野市の予察灯においても初飛来を確認した。その後は県内各地の予察灯で6月13・14日、20・21日に飛来がみられたが、6月5日に比べて飛来量は少なかった。（別紙1）

イ 本田での成幼虫数は平年並であった。

ウ 気象予報では7月の平均気温は平年より高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

今後の発生状況に注意し、発生予察情報、ホームページの飛来状況及びテレホンサービスを参照する。

5 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 県内各地の予察灯及びネットトラップでは飛来を確認していない。（別紙1）

イ 本田での発生は確認していない。

ウ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア セジロウンカと同時期に飛来している可能性があるため、ほ場での発

生状況の把握に努める。

イ 今後の発生状況に注意し、発生予察情報、ホームページの飛来状況及びテレホンサービスを参照する。

6 コブノメイガ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年よりやや遅く、前年並

イ 発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 普通期水稲での発生は確認していない。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

今後の飛来状況に注意し、発生予察情報、テレホンサービスを参照する。

(別紙1)

ウンカ類飛来状況 6月25日 現在

6月 セジロウンカの捕獲数及び誘殺数(頭)

日	曜日	筑紫野市 ネットラップ	筑紫野市 予察灯	筑後市 予察灯	行橋市 予察灯	二丈町 予察灯	飯塚市 予察灯	遠賀町 予察灯
1	金	0	0	0	0	0	0	0
2	土	0	0	0	0	0	0	0
3	日	0	0	0	0	0	0	0
4	月	0	0	0	0	0	0	0
5	火	2	2	48	0	0	0	0
6	水	7	0	33	0	0	1	0
7	木	9	0	4	1	0	0	0
8	金	2	0	2	0	0	0	0
9	土	2	0	0	0	0	0	1
10	日	3	0	0	0	0	0	0
11	月	1	0	0	0	0	0	0
12	火	0	0	0	0	0	0	0
13	水	0	0	5	0	1	0	0
14	木	0	1	0	0	0	0	0
15	金	2	0	1	0	0	0	0
16	土	2	0	0	1	0	0	0
17	日	2	0	0	0	0	0	0
18	月	0	0	0	1	0	0	0
19	火	0	0	1	0	0	0	0
20	水	1	0	1	0	0	0	0
21	木	0	2	1	1	0	0	0
22	金	1	0	0	0	1	0	1
23	土	0	0	0	0	0	0	0
24	日	0	0	0	0	0	0	0

6月 トビロウンカの捕獲数及び誘殺数(頭)

日	曜日	筑紫野市 ネットラップ	筑紫野市 予察灯	筑後市 予察灯	行橋市 予察灯	二丈町 予察灯	飯塚市 予察灯	遠賀町 予察灯
1	金	0	0	0	0	0	0	0
2	土	0	0	0	0	0	0	0
3	日	0	0	0	0	0	0	0
4	月	0	0	0	0	0	0	0
5	火	0	0	0	0	0	0	0
6	水	0	0	0	0	0	0	0
7	木	0	0	0	0	0	0	0
8	金	0	0	0	0	0	0	0
9	土	0	0	0	0	0	0	0
10	日	0	0	0	0	0	0	0
11	月	0	0	0	0	0	0	0
12	火	0	0	0	0	0	0	0
13	水	0	0	0	0	0	0	0
14	木	0	0	0	0	0	0	0
15	金	0	0	0	0	0	0	0
16	土	0	0	0	0	0	0	0
17	日	0	0	0	0	0	0	0
18	月	0	0	0	0	0	0	0
19	火	0	0	0	0	0	0	0
20	水	0	0	0	0	0	0	0
21	木	0	0	0	0	0	0	0
22	金	0	0	0	0	0	0	0
23	土	0	0	0	0	0	0	0
24	日	0	0	0	0	0	0	0

【果 樹】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年)	発生予想 (平年)
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	並 並	やや多い 並
ナシ	ナシヒメシンクイ ハダニ類	並 やや多い	並 やや多い
ブドウ	べと病	やや少ない	並
カキ	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	並 並 並 やや多い	並 並 並 やや多い
ナシ、カキ	カメムシ類	少ない	少ない

【果 樹】

1 カンキツの黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、発病は認められなかった。(平年：0.2%、前年：0%)。

イ 福岡管区气象台の6月1日～28日までの積算降水量は472mmで、平年の6月の降水量の1.8倍に達している。

ウ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝を極力除去する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mm毎に薬剤散布を行う。

2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では寄生葉率は平均17.3%(平年：15.2%、前年：29.7%)、発生ほ場率は68.4%(平年：50.2%、前年：68.4%)であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨明け後、高温乾燥が続くと急激に増加する可能性があるため、発生状況に注意し、雌成虫の寄生葉率が30～40%を目安に防除を行う。

イ 防除にあたっては、葉裏にも十分薬剤がかかるように丁寧に散布する。

ウ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続し

て使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

3 ナシのナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年並

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる第1世代成虫の発蛾最盛期は、平坦地域で5月6半旬、山間地域で6月1～2半旬頃であり、平年並であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で7月1～2半旬、山間地域で7月2～3半旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期に7～10日間隔で2～3回防除する。

イ 幼虫は主として果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に十分薬液がかかるように散布する。

ウ 交信攪乱剤を施用する場合は、傾斜地ほ場や小面積では効果が低下するので注意する。

4 ナシのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査の結果、寄生葉率は平均5.0%（平年：1.4%、前年：3.7%）、発生ほ場率は41.2%（平年：22.6%、前年：43.8%）であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除にあたっては、薬液が葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

5 ブドウのべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査の結果、発生葉率は平均0.05%（平年：0.6%、前年：0.02%）、発生ほ場率は7.1%（平年：17.9%、前年：7.7%）であった。

イ 福岡管区気象台の6月1日～28日までの積算降水量は472mmで、平年の6月の降水量の1.8倍に達している。

ウ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期に低温で雨が多いと多発しやすく、発病後の防除効果は劣るため、予防散布を徹底する。

イ 罹病葉は感染源となるので極力除去する。

6 カキの炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並で前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、発病枝率は平均1.3%（平年：1.3%、前年：0.9%）、発生ほ場率は平均13.3%（平年：28.2%、前年：43.8%）であった。

イ 福岡管区气象台の6月1日～28日までの積算降水量は472mmで、平年の6月の降水量の1.8倍に達している。

ウ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹冠内部の徒長枝に感染し、発病しやすいので、防除にあたっては薬液が樹冠内部にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので極力除去する。

7 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では寄生果率は平均2.0%（平年：4.0%、前年：3.9%）、発生ほ場率は平均53.3%（平年：36.4%、前年：62.5%）であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月中下旬の防除を失したほ場では、早急に防除を行う。

イ 本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などの薬剤がかかり難い箇所によく寄生しているので、十分な薬量を使って散布むらのないように防除する。

8 ナシ、カキ等のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

発生時期：越冬量と今年のスギ及びヒノキの球果の結実状況から、本年の発生パターンは後期発生型（8月～10月）になるものと思われる。

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市吉木の予察灯におけるチャバネアオカメムシの6月5半旬までの累計誘殺数は、46頭（平年：1,710頭、前年：4,301頭）で、ツヤアオカメムシの誘殺数は23頭（平年：572頭、前年：1,943頭）と少なかった。

イ 筑紫野市吉木の集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの6月5半旬までの累計誘殺数は、147頭（前年：4,556頭）で、ツヤアオカメムシの誘殺数は11頭（前年：485頭）と少なかった。

ウ 気象予報では、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

大半のほ場では、カメムシを対象とした防除は必要ないが、毎年発生の多いほ場では、7月後半からの発生状況に注意する。

【茶】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年)	発生予想 (平年)
茶	炭疽病	並	並
	輪斑病	並	並
	チャノコカクモンハマキ	やや少ない	並
	カンザワハダニ	やや少ない	並
	チャノホソガ	やや多い	やや多い
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並
	チャノキイロアザミウマ	並	並

平年値（過去10年間の平均）がない場合は、前年までの平均値を用いた。

【茶】

1 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、病葉は認められなかった（1㎡当たり病葉数
平年：0.0葉、前年：0葉）。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉や茎にできた傷口から病原菌が感染するため、摘採あるいは整枝直後に薬剤防除を実施する。

イ 輪斑病が発生したほ場では、新梢枯死症の発生も多くなるので萌芽期及び2葉期に薬剤防除を実施する。

ウ 防除薬剤は「平成13年度茶病虫害防除基準」を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める（この項は以下の病虫害についても同様）。

2 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年並で前年よりやや早い

イ 発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる6月5半旬までの累計誘殺数は、筑後市で255頭（前年：318頭）であった。また、第1世代成虫の発蛾最盛期は6月11日頃であり、前年より3日ほど早かった。

イ 6月5半旬の調査では、1㎡当り巻葉数は平均0.04葉（平年：0.01葉、前年：0葉）であった。

ウ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 巻葉後の防除効果は劣るため、巻葉がみられたら直ちに防除を行う。

イ 第2世代成虫の発蛾最盛期は、前年よりやや早くなる可能性が高いので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後に防除を行う。

3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、寄生葉率は平均2.3% (平年: 5.7%、前年: 14.8%)であった。50葉当たり虫数は平均2.8頭 (平年: 5.7頭、前年: 14.8頭)であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生のみられない茶園もあるので発生状況を調べ、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 本害虫の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

ア 発生時期: 平年並で前年よりやや早い

イ 発生量 : 平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 黒木町(八女分場調査)のフェロモントラップによる6月5半旬までの累計誘殺数は、1,324頭(前5カ年平均: 779頭、前年: 953頭)で、前年秋の最終発生が多かったため、越冬世代及び第1世代成虫の発生が多かった。また、第1世代成虫の発蛾最盛期は6月1半旬であり、前年より2半旬早かった。

イ 6月5半旬の調査では、1m²当り巻葉数は平均2.3葉(平年: 1.1葉、前年: 1.8葉)であった。

ウ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 巻葉後の防除効果は劣るため、巻葉がみられたら直ちに防除を行う。

イ 第2世代成虫の発蛾最盛期は、黒木町で7月2半旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後に防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬のたたき落とし法による調査では、平均4.1頭(平年: 4.4頭、前年: 4.3頭)の発生であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ほとんどの茶園で発生しているので発生状況を調べ、たたき落とし法(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

【野菜】

作物名	病害虫名	発生現況 (平年)	発生予想 (平年)
ナス (露地)	うどんこ病 綿疫病 ミナミキイロアザミウマ アブラムシ類 ハダニ類	並 並 やや多い やや少ない 並	並 並 やや多い やや少ない 並
イチゴ (育苗床)	うどんこ病 炭疽病	やや少ない 並	やや少ない 並
アスパラガス	斑点病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類 ヨトウ・タバコガ類	少ない やや少ない やや少ない やや多い 並	やや少ない 並 並 やや多い 並
ネギ (露地)	シロイチモジヨトウ*	並	並

- ・ 平年値 (過去 10 年間の平均) が ない場合は、前年までの平均値を用いた。
- ・ * はフェロモントラップによる誘殺頭数
- ・ アスパラガスは、前年より調査のため、前年値との比較

【野菜】

1 露地ナスの綿疫病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6 月 5 半旬調査の結果、発病を認めなかった (発病果率 平年：
0.5%、前年：0%)。

イ 気象予報では、7 月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 不要な下葉を除去すると共に適宜、整枝、せん定をして通風、採光をよくする。

イ 降雨時の土砂の跳ね上がり等で多発することがあるので、発生状況に十分注意し、初期防除を徹底する。

ウ 窒素肥料の多用を避け、適正な施肥を行う。

エ 薬剤防除については県野菜病害虫防除基準を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める (以下の病害虫についても同様)。

2 露地ナスのミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 6 月 5 半旬調査の結果、寄生葉率は平均 14.6% (平年：7.6%、前年：3.6%) であった。一部のほ場では多発している。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 周辺ほ場からの飛び込みが考えられるので、特に施設ナス収穫終了時期は注意する。

イ 多発生後は防除が困難であるため、発生初期のうちに防除を徹底する。

ウ 本害虫の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

3 イチゴのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：前8カ年平均・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、子株での発病株率は平均21.4%（前8カ年平均：53.4%、前年：43.5%）であった。一部のほ場では多発している。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほでの発病は発病（保菌）苗の持込みによるので、育苗期の防除を徹底して、健全苗の確保に努める。

イ 上位葉への感染を防ぐとともに、薬剤の付着をよくするため可能な限り下葉を除去する。

ウ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

4 イチゴの炭疽病

（*Colletotrichum acutatum* 菌による葉枯れ炭疽及び *G lomerella cingulata* 菌による炭疽病）

(1) 予報の内容

発生量：前8カ年平均・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、子株での発病は認められなかった（前8カ年平均：0.4%、前年：0.3%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、早めに除去する。

イ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後や下葉かぎ後の防除を徹底する。

ウ 葉枯れ炭疽については、輪斑病など類似の病徴を示すものがあり、病徴だけで判断がつかない場合は地域農業改良普及センタ-や当所へ同定を依頼し、病害を特定する。

エ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

5 アスパラガスの斑点病

(1) 予報の内容

発生量：前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病株率は平均4.4%（前年：59.2%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 過繁茂になると多発するので、整枝を的確に行いほ場内の通風をよくする。

イ 発病部位はできる限り取り除き、薬剤による防除を徹底する。

6 アスパラガスのアブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生株率は平均16.7%（前年：37.5%）であった。一部のほ場では多発している。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高いと予想されている。

7 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生株率は平均61.1%（前年：26.7%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高いと予想されている。

8 ネギのシロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 福岡市、朝倉町（2ヶ所）および行橋市の6月2半旬～5半旬のフェロモントラップによる誘殺頭数は平均50.0頭（平年：60.5頭、前年：77.0頭）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫はそのまま葉身内に食入し、内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉は見つけ次第直ちに除去する。

イ 中齢以降の幼虫に対しては薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、薬剤防除は卵期から孵化幼虫期に食入防止をねらって行う。

7月の気象予報（1か月）

（予報期間 6月23日～7月22日）

2001年6月22日
福岡管区气象台発表

【概要】

向こう1か月の平均気温は平年より高く、降水量、日照時間は平年並の可能性が大きいでしょう。

【要素別確率】

（単位％）

要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	10	30	60
降水量	30	50	20
日照時間	30	50	20

- < 1週目の予報 > 6月23日～6月29日
この期間の平均気温は、平年より高い可能性が大きいでしょう。
- < 2週目の予報 > 6月30日～7月6日
この期間の平均気温は、平年より高い可能性が大きいでしょう。
- < 3～4週目の予報 > 7月7日～7月20日
この期間の平均気温は、平年より高い可能性が大きいでしょう。

参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3～4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温（ ）		
平均気温（ ）	降水量（mm）	日照時間（h）	1週目	2週目	3-4週目
25.8	319.9	151.0	23.9	25.2	26.8

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページとテレホンサービスでお知らせしています。アドレス及び電話番号は下記のとおりです。

ホームページアドレス

www.jpnpn.ne.jp/fukuoka

電子メールアドレス

kfok0301@sp.jpnpn.ne.jp

テレホンサービス

092-928-6401（普通作・イグサ）

092-928-6402（果樹）

092-928-6403（野菜・茶）